後には地に垂り、根梢地に入て樹となり、又細根下垂して頗怪狀をなす、其枝の著たる根を悉離せば、幹に輪囷の形あり、小兒其細根を紐となし弄ぶ、四五尺より長きものは數丈に至る廣東新語に榕鬚といふ、其枝霖雨中に插みてよく活す、其幹大なるは中空により、下質脆くして材とならず、又此樹に生ずる菌をオホキタケといふ、形香簟に似て白褐色、味美にして毒なし、薩摩にて方言アカウといひて、海邊處々に產すといふ、本國にては海部郡衣奈莊より、日高郡三尾莊比井御埼までの間、海邊所々にあり、其餘他州に產する事を聞かず、漢土にても北地には產せず、唐の劉恂の嶺表錄異に榕樹桂廣容南府郭之內多栽此樹、葉繁、葉如冬青、秋冬不凋、枝條既蒙細而根鬚繚繞、枝幹屈盤、上生軟條、如藤垂下、漸及地、藤梢入土、根節成一大樹、三五處有根者、又橫枝著鄰樹、則連理、南人以爲常、不謂之瑞木、といひ、又品字箋に、榕惟生閩中、福州尤盛、故號榕城、といひ、嶺南雜記に、榕樹閩廣最多、他省則無、故紅梅驛以北無榕、といへり、皇國にても京攝の間に稀に苗を盆種して珍玩するものあれども、大樹となりがたし、

〔伊呂波字類抄保殖物附殖物具〕菩提樹

〔大和本草十二雜木〕菩提樹○中略　凡念珠ニ作ル物ヲ世俗皆菩提樹ト稱ス故ニ世俗ノ菩提子ト稱スル物多シ、モクレンジモボダイシト云、無患子、薏苡モ同、何レモ菩提樹ニハ非ズ、菩提樹ノ葉ハ木犀ノ葉ニ似タリ、葉ノウラニ莖アリテ、ソレニ實ナル、常ノ木ニ異ナリ、京都泉涌寺六角堂同寺町、又叡山西塔ニアリ、元亨釋書ニ、千光國師榮西入宋ノ時、宋ヨリ菩提樹ノタネヲワタシテ、筑前香椎神宮ノ側ニウエシ事アリ、報恩寺ト云寺ニアリシト云、此寺ハ千光國師モロコシヨリ歸リテ初テ建シ寺也、今ハ寺モ菩提樹モナシ、畿內ニアルハ昔此寺ノ木ノ實ヲ傳ヘ植シニヤ、翻譯名義曰、菩提樹佛生其下、成等正覺、因而謂之菩提樹、冬夏不凋、光鮮不變トイヘリ、潛確類書九十九、異木類ニ、菩提樹ヲ載タリ、曰末結蕊、先乃別抽一葉、長指半許、濶兩指乃結蕊于葉下、今案本邦ニアルモ亦カクノ如シ、

〔東大寺造立供養記〕抑傳西天之道樹、移東土之庭前、殖鯖木之古跡、期龍花之三會、古人傳云、宋求那跋陁羅三藏、至廣府立戒壇、種菩提樹、其後瑯琊道邃和尙傳之、以種天台山也、日本榮西上人往天台